



ふくしま創生塾
復興から創生へ
2013 — 2025



— 8期生 —

はんだ
真仁 しんじ

広島県出身。総合商社、福島県庁でのソーシャルワーカーなどの経験を経て、NPO法人チームふくしまを設立。東日本大震災と東京電力福島第一原発事故後は「福島ひまわり里親プロジェクト」で福島と全国をつなぎ、復興支援の新たなモデルを構築した。現在は「お互いさまチケット」やコミュニティフリッジの運営など「恩送り」の輪を広める活動に注力。ビジネスと福祉の視点を融合させた取り組みを展開している。



全国に「恩送り」を根付かせる

福島を「同情」から「尊敬」へ

— 震災と原発事故で、福島は世界一、同情されるまちになりました。次は福島を尊敬されるまちにしたいんです

半田真仁さんが仲間と立ち上げたNPO法人チームふくしまは震災後、「福島ひまわり里親プロジェクト」を展開した。全国の学校などで育てたひまわりの種を福島に送ってもらい、福島の福祉作業所で袋詰め、その種を全国で購入してもらい、また育ててもらう。その仕組みは、全国と福島を繋ぐ大きな連帯を生んだ。

ふくしま創生塾に入塾したのは2020年。事業を見つめ直す時間となった。他の塾生たちとの対話から、自分たちの活動を言語化し、社会的な意義を問い直していく。印象に残っているのは、加藤博敏塾長からのフィードバックだ。当時構想していた「ひまわり防災検定」について「おもしろい」と太鼓判を押された。

— 第三者の視点から承認されたことで、この方向性で良いのだと確信が持てました

ひまわり防災検定は、防災減

災に向けた独自の取り組みだ。講座やワークショップを通じて防災や福祉、キャリアを学ぶ。「もしも」よりも「いつも」、「連携」よりも「ともに」。大切な命を守る意識を、後世に語り継ぎ、日本中に広げていく。

盟友の遺志継ぎ、貧困を生まない仕組みづくり

創生塾での学びを経て、半田さんらの活動は転換点を迎える。2021年5月、共に活動してきた盟友であり、副理事長を務めていた吉成洋拍さんがこの世を去った。現在半田さんが注力している子ども食堂や「お互いさまチケット」の構想は、もともと吉成さんが望んでいたものだった。当時の半田さんは反対していた。

—— 県でソーシャルワーカーをしていた経験から、福祉領域は安易に手を出すとお金にならず、スタッフを守れなくなると知っていたからです。商人がやることではない、と話していました

吉成さんが志半ばでこの世を去り、残されたのは、彼が情熱を注いでいた「子どもたちのための場所」という宿題。「彼がやりたかったことを、自分が形にする」。理屈を超えた供養としての

決意だった。

事業を引き継ぎ、半田さんは自身の得意とする「仕組み化」の技術を注いでいった。生まれたのが、「見ない、会わない優しさ」という独自の支援哲学だ。本当に行き詰まった人は、恥ずかしさやプライドから支援の窓口には現れない。だから、「お互いさま倉庫・コミュニティフリッジひまわり」は無人だ。誰にも会わずに必要な物資を受け取れる。

県内外の飲食店で展開する「お互いさまチケット」は、恩送り（ペイフォワード）の仕組み。来店客が商品を先払いでチケットとして購入すると、チケットの利用者は無料または低価格でサービスを利用できる。現在は福島県内87カ所、国内外133カ所で導入されている。県内では、モスバーガー14店舗をはじめ、さまざまな飲食店に広がっている。



この仕組みは、飲食店にもビジネスメリットをもたらす。チケットを買った客は「使われたか」が気になって再来店する。SNSで発信してもらえれば広告効果も生まれる。企業の社会的活動として、採用や社内教育にもつながる。店側の負担は1円もない。

今後はJICAと協力して国内の外国人向けのチケットも始まる。外国籍で日本語の理解が十分でない方の居場所づくりだ。「お互いさまモデル」の鍵は、あげる人も使う人もハッピーであること。片方だけでは続かない。

—— 理念と経営方針をちゃんと合わせる。経営理念を思いやりや恩送りとするならば、このチケットが回れば理念が浸透していきます。ビジネスメリットを考えれば、導入しない理由がないんです

貧困を解消するのではなく、貧困を生まない仕組みのきっかけに。吉成さんの想いを、持続可能な支援の仕組みへと形にした。



組織でなくラボ、人が育つ場所に

— 僕は組織を大きくすること自体には、これっぽっちも興味がありません

半田さんのNPOの組織運営は独特だ。できるだけ黒子に徹し、自分がいなくても回る仕組みづくりに取り組む。一方で、若手スタッフの育成には力を入れる。彼にとってチームふくしまは、組織というより、人が育つための「ラボ(実験場)」だ。

— 若手にはどんどん失敗させるんです。致命傷にならない程度の失敗を経験させて、一緒にリカバリーを考える。それが一番の成長になるから

経営者として半田さんが一番大切にしているのは、働いている人の幸せだという。

— 関わるメンバーに後悔させたくない。来た人がいかに喜んで帰るかを大事にしたい

インターンから入った若手が成長し、やがて巣立っていく。辞めた後も寄付をしてくれる元スタッフもいる。

半田さんは、京都の平等院鳳凰堂の池に例えて自身の役割を語る。

— 歴史に残らず、名脇役でいたい

人脈を作るのではなく、自分が相手の人脈になって応援する。そんな存在でありたいという。

「お互いさまチケット」は、今や県内外に広がり、無人の倉庫には、今日も誰かが静かに訪れる。盟友との約束から始まった仕組みは、少しずつ福島を、そして日本を変えていく。福島に、そして全国に「お互いさま」の精神が根を張り始めている。

